

ミャンマーの地震被害について

地盤工学会派遣の調査団として、九大ハザリカ教授とともに6月12日から16日まで現地で活動した。報道とは異なり被災地の治安は維持されており、全く危険は感じなかった。また迅速に復旧活動が始まっていることも印象的で、液状化噴砂は大半が清掃されているほか、発災後2か月有余で倒壊建物の撤去も進んでいた。サガイン断層の右横ずれは1 m以上ある一方、鉛直成分はほとんど無かった。橋桁の落下は古いサガイン橋の例が広く知られているが、近年はあまり使われておらず、社会的な損失は小さい。むしろ主要道路の橋が Inn Wa 南方で落橋したほうが重要で、これは河岸の地すべりにより橋脚が押されて傾斜、橋桁が二スパンで落橋したものである。現地踏査時には残る三スパンも合わせ、橋桁は残っていなかった。その他、橋脚が1.5m 不審な沈下をした例や、橋桁の支承が狭くて落橋が起こりやすいことが目に付いた。建築については、高層マンションの崩壊事例 (Mandalay) が目立つが、他にも崩壊例は多かった。そのほぼ全部が4階建て以上であり、その一階や二階に損傷が多かった。崩壊例では一階が店舗や駐車場で、壁が少ないという弱点が共通して見られた。仏教のパゴダの崩壊は、普遍的に発生した。他方、崖崩れや斜面不安定がほとんど起きていない(人工の盛土を除く)ことが、2023年のトルコ・シリア地震と同様の特徴であった。これらの知見の報告会を最終日にヤンゴンで開催し、ビザ取得などでお世話になったお礼の午餐会を開いて帰国した。

東畑郁生